

学際

No.1 JANUARY 2016

編集 斎藤 修 / 猪木 武徳

学 際

NO.1

東アジア三国史

JANUARY ◆ 2016

曖昧な現実を科学する

私たちが取り巻く「現実」は、

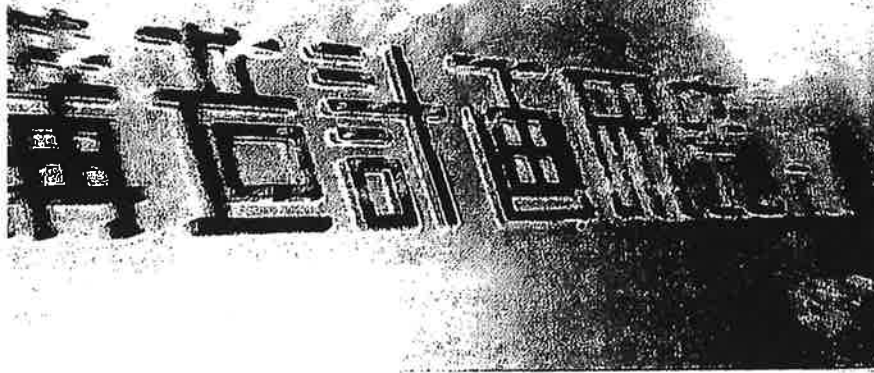
不確実な要素が複雑に絡み合っている。

その構造を理解し、

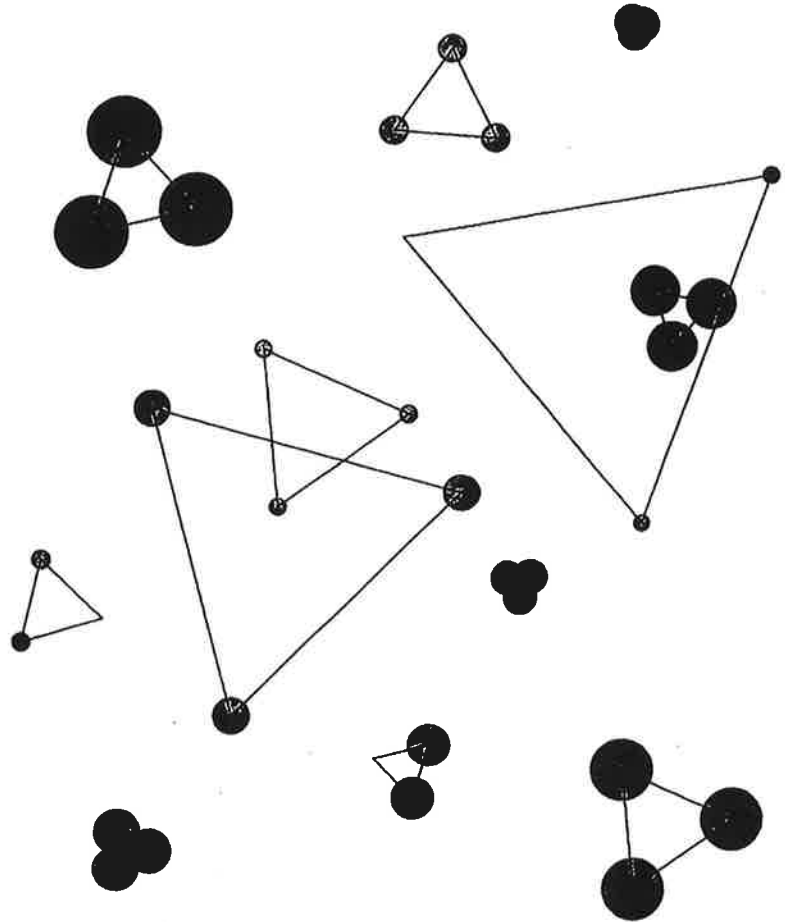
その中に潜むルールを見つけよう。

社会に役立てること。

それが私たちのシゴトです。



構造計画研究所
KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.



統計研究会

中村隆英先生と経済史*

阿部 武司



はじめに：大学院での授業風景

今から約40年前、東京大学経済学部の学部生であった私は、日本経済史の研究を志し、研究書や論文を十分理解できないながら読み始めていたが、当時東大で必読とされていた文献の大部分は、いわゆる講座派や宇野派の流れに位置づけられるマルクス経済学の立場から記述された経済史であった。私は、あとから見れば近代経済学に通じるところが多かった宇野派の分析に多少のシンパシーは持ったものの、それでも難解な概念や、論理の運びの難しさには、なじめない点が多かった。そうした中で、赤門の近くにあった社会科学書の専門店鈴木書店で中村先生の『戦前期日本経済成長の分析』（岩波書店、1971年）をたまたま入手したところ、経済学や経済史に限らず政治史をはじめ文学作品にまで及ぶ多彩な文献に裏づけられた、ドグマにとらわれない自由な発想が展開されており、感銘深く通読した。

1977年春、大学院に進学した私は、事務上の扱いでは統計学の科目であった「1930～40年代の経済と経済政策」と題する授業を中村先生が開講されていることを知り、さっそく参加させていただき、結局、大学院に籍を置いた5年間を通じてお世話になった。当

時、経済学研究科に多数在籍していた経済史専攻の大学院生のうちその授業に出席していたのは富永憲生、宮島英昭の両氏と私くらいであったが、経済学その他の分野では渋谷博史、宮崎正康、持田信樹、伊藤修、国史学専攻では小風秀雅、照沼康孝、山室健徳、季武嘉也、国際関係論専攻では荒井功などの諸氏と机を並べて学んだことを思い出す。他大学の大学院からも一橋大学の坂本雅子、松本俊郎、早稲田大学の藤井信幸といった面々が出席していた。いずれも現在各分野の第一人者となっているこうした皆さんのお名前を挙げていくと、先生の学問に惹かれて集まった当時の若者たちの関心の多様さに対応するように、中村先生の学問の幅がきわめて広がったことを改めて感じさせられる。

大学院での中村先生の授業では、世に出て間もなかった原朗先生の論文「戦時統制経済の開始」（『岩波講座 日本歴史』第20巻、1976年）を、その脚注に示されている資料に戻って精読するという作業から始まったが、出席者が熱心に課題に取り組んでいたためであろうか、まもなく先生が、（例えば「今度こういう本が出たよ」というように）経済史を中心に日本近代史に関する文献をいかにも面白そうにあげられ、その後で、「誰か紹介してみないか」と誘われるようになり、その方式が定着していった。そのほか各自の個人研究についても積極的な発表の場が持たれ、また、先生が招かれた外部のスピーカーから興味深いお話をうかがうこともあった。後に聞いたところによれば、「1930～40年代の経済と経済政策」という科目は、私が初めて出席した年度の1～2年前に始まったばかりのようだった。

この授業で私は、例えば神永文三『日支事変経済史』（議会政治社、1937年）、桑野仁『戦時通貨工作史論』（法政大学出版社、1965年）、Ann Trotter, *Britain and East Asia: 1933-1937* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1975)、Gordon M. Berger, *Parties out of*

Power in Japan: 1931-1941 (Princeton: Princeton Univ. Press, 1977) などの概要を1~2時間で紹介したことを記憶している。いずれもそうした機会がなければ読まずに終わってしまったであろう名著であり、最後の2冊のように経済史とは言えない文献もしばしば勉強させてもらった。

授業が終わったあとも中村先生はよく、出席者を赤門近くの喫茶店に誘って下さり、1~2時間お付き合い下さった。授業を離れたお話は、経済史の枠を超えて、山県有朋、原敬、近衛文麿などの歴史的人物の論評や、文学・音楽・演劇などの芸術にも及び、そうしたお話をされていた時の先生は大変楽しそうであった。

二重構造論と「分析」

中村先生は、日本経済の実態を統計データに基づき分析されるお仕事をお若いころから終生続けられたが、その中で経済史に大きく関連すると思われるのが、大企業と中小企業との間の格差をめぐる、いわゆる二重構造論へのご関心であった。高度経済成長の最中でも多くのエコノミストが二重構造を日本経済の宿命として受けとめていたのに対して、中村先生はそれが経済成長の中で急速に変容を遂げていき、解消していったことを早くから主張されていた。先生はさらに、恩師有澤廣巳氏が1950年代初めに提起され、大川一司氏をはじめ一橋大学経済研究所に所属していた近代経済学者たちによって考察が深められていったこのトピックを、戦前期に行われたいわゆる日本資本主義論争²⁾とも関連させて、後発工業国日本の長期的発展過程の中に位置づけられたのではないかと私は推察している。

そうした問題意識の集大成が前掲の名著『戦前期日本経済成長の分析』(以下、『分析』と略記)であった。同書によれば日本では、明治期から第一次世界大戦の好況期まで、新たに定着した近代産業のほか、農業、そして農村と深い関わりを持つ在来産業が同時並行

的に発展していったが、大戦後の1920年以降には財閥系などの大企業が重工業化を推進しつつめざましい発展を遂げていった一方で、農工間の格差が拡大し、また製造業内部でも大企業と中小企業との格差が広がるなど、不均衡発展が進んだ、という。中村先生は、こうした壮大な構図を、一橋大学経済研究所のスタッフを中心に東洋経済新報社から『長期経済統計』として公刊されつつあったマクロデータを駆使して描きつつ、在来産業の展開とその担い手、第一次世界大戦のバブルとその崩壊、以後の1920年代の長期不況下における都市化と電化に支えられた緩やかな経済成長の持続、井上準之助蔵相による金解禁政策の失敗、高橋是清蔵相の経済政策による世界恐慌からのいち早い脱出、日本の綿紡績会社が中国に設立した在华紡の発展、戦時経済の展開など、それまで説明が不十分であった論点に関する優れた実証的考察を散りばめて同書を完成された。

中村先生は、「この奮物を自分はずいぶん気合いを入れて書き上げたのだが、それが世に出た時に経済史家やマルクス経済学者は無視した。唯一、大内力氏が書評を書いてくれたのがうれしかった」と筆者に語っておられた。³⁾ 私見によれば、日本における日本経済史研究には、特定のテーマあるいは特定の時期に研究者の関心が集中するという傾向が、近年まで、とくに東京周辺では強かったように思える。『分析』が出版された1970年代初頭は、旧講座派系の研究者集団による明治中後期を中心とする産業革命論が隆盛を極めていた。⁴⁾ 『分析』は、明治期に関してはマクロデータの分析に終始していたため、ミクロ分析に重点を置いていた日本経済史学界の主流派が同書を「無視した」と先生がお感じになったのも無理がないように思われる。

戦間期経済史

しかし、1970年代の後半には状況は大きく変化した。いわゆる宇

野派⁵⁾が第一次世界大戦以降の戦間期に関する産業史研究を精力的に推進するようになり、それまで解明が不十分であったその時期の日本経済の分析が研究者の関心を惹くようになったのである。戦間期の日本経済史に関わる創見に満ちた中村先生のご著書は、その研究者集団に広く読まれ、受け入れられていった。とりわけ、2002年に早逝された橋本寿朗氏は早くから同書の重要性を認識しており、同氏の『大恐慌期の日本資本主義』（東京大学出版会、1983年）が刊行された時、この書物を橋本氏から贈られた中村先生は、「自分の仕事をきちんと評価してくれた人が登場した。橋本さんは自分がやりたくて叶わなかったことを見事に果たしてくれた」と大変喜んでおられた。のちに触れる岩波書店から刊行された『日本経済史』シリーズの執筆者を選ぶ際に、中村先生が、東大教養学部で親しく指導された戦時経済史研究の第一人者の原朗先生、マクロ分析の力量を高く評価されていた三和良一先生といった方々と並んで、橋本氏を強く推されていたことを、編者の末席に名を連ねていた私はよく覚えている。なお、中村先生ご自身も、『経済政策の運命』（日本経済新聞社、1967年）、編著『戦間期の日本経済分析』（山川出版社、1981年）にみられるように、『分析』以降も戦間期経済史の研究をいっそう深めていかれた。

在来産業論

中村先生が前掲書で提起されていた在来産業論も経済史の世界では無視され、長らく日の目を浴びなかった。⁶⁾ 手前味噌で恐縮ながら、私が、中村先生のご教示を受けて執筆した「明治前期における日本の在来産業—綿織物業の場合」（梅村又次・中村隆英編『松方財政と殖産興業政策』、国際連合大学／東京大学出版会、1983年、第10章）が1983年に出版されてからしばらくして、織物業を中心に醸造業、製陶業、商業などの産業別に在来産業研究が盛んになってい

ったように思う。在来産業に関しては中村先生ご自身も、『分析』以後発表されたご論文を集大成した『明治大正期の経済』（東京大学出版会、1986年）の第Ⅱ部のほか、『日本の経済発展と在来産業』（山川出版社、1997年）および『都市化と在来産業』（日本経済評論社、2002年。藤井信幸氏との共編著）という、先生を囲む若手研究者との研究会の成果を取りまとめた2冊の論文集を編集されている。

戦時経済論

『分析』でもう一つ見落とせないのが、戦時統制経済に関する一章である。昭和の年数と満年齢が一致していた中村先生には、ご自身の青春と重なる戦時期には特別な思い入れがおりだったようである。この章では、1936年の二・二六事件ののちに登場した馬場財政が、軍部の際限のない予算増額要求の道を切り開いたこと、統制がいったん始まると、それが止めどなく広がっていったこと、日中戦争期には国際収支が、太平洋戦争期には船腹保有量が、それぞれ戦争の趨勢を決定したこと、戦争末期の生活水準の低下に国民が声も上げずに耐えていったことなど重要な指摘が淡々と記述されている。先生はその後も例えば、『日本の経済統制』（日本経済新聞社、1974年）、「戦争経済とその崩壊」（『岩波講座 日本歴史』第21巻、1977年）、「戦時日本の華北経済支配」（山川出版社、1983年）など、戦時期に関するご研究の成果を旺盛に世に出されていった。1980年前後に主流派の経済史家も加わって隆盛を極めていた戦間期研究も20世紀末には下火となり、代わって戦時期、占領期、そして高度経済成長期の研究が一度に盛んになっていったように思われるが、そのうちの戦時期に関する研究は、中村先生と、すでにお名前をあげた原朗先生のお二人の研究を基礎に進められているとして誤りではなかろう。

以上のように『分析』は、長い時間を経ながら日本の経済史学界

に大きな影響を及ぼしていった。同書は英訳版、*Economic Growth in Prewar Japan* (New Haven: Yale University Press, 1983) によって国際的にもよく知られている。ただし、筆者には、均衡成長から不均衡成長へという本書を貫く大きな論理は、いまだに学界から「無視」されているように思われる。それにも正当な評価がなされるべきではないだろうか。

その他の重要な研究領域

中村先生が、『分析』の出版のち同書に含まれていたアイデアを多方面に発展させていかれたことは、以上の記述からもうかがわれるであろうが、先生はその後も日本経済史に関するいくつかの重要な領域を切り開かれた。まず、編著『占領期日本の経済と政治』（東京大学出版会、1979年）、共編著『資料・戦後日本の経済政策構想』全3巻（東京大学出版会、1990年）など第二次世界大戦後の占領期に関するお仕事である。また、『戦前期日本経済成長の分析』ではあまりなされていなかった明治期に関する考察を、梅村又次氏との共編著『松方財政と殖産興業政策』、あるいは『明治大正期の経済』（ともに前出）などで深めていかれた。さらに、東大を定年退官されてお茶の水女子大学に移籍されたのち、同大学関連の女性研究者たちとご一緒に、様々な社会階層の家庭が戦前から戦後にかけて残した家計簿を詳細に分析され、編著『家計簿からみた近代日本生活史』（東京大学出版会、1993年）を出版された。同書は、まことに独創的なアイデアの所産であるとともに、研究環境の変化を先生が巧みに活用されていた事実も物語っている。なお、近代日本における在来産業あるいは中小企業分野で活躍した、知名度が比較的低い企業家たちの事績を、伝記類から取りまとめた『日本経済の建設者』（日本経済新聞社、1973年）も、経営史の分野で正当に評価されてもよい先駆的業績と思われる。

数量経済史 (QEH) 研究会

中村先生の日本経済史研究に関連して触れておかなければならぬことのひとつが数量経済史 (QEH) 研究会との関わりである。QEH 研究会は、1971年に梅村又次、新保博、速水融、西川俊作、尾高焯之助、山本有造の諸氏が結成し、のちに安場保吉、斎藤修、宮本又郎、猪木武徳の諸氏、そして最後に阿部武司を同人に加えていった。この研究会は1972年から数年に一度、富士山麓の帝人の研修所に多数の報告者を集めて泊まり込みのワークショップを開催し、その準備研究会も含め、近代経済学の理論と信頼できるデータとを基礎にした経済史研究を日本に広めていった。マルクス主義を含むあらゆるドグマを排して自由闊達な研究を進めてきた研究会であり、江戸時代の人口や物価に関する研究をはじめ重要な成果を生み出し、少数派ながら学界を次第にリードしていくようになった。

中村先生は、このQEH研究会とは結成当初から深いお付き合いがあったとうかがっているが、なぜか正式に同人にはならなかった。それはともあれ、QEH研究会の活動が学界でも無視できなくなった1980年代末に、『分析』の編集者であった岩波書店の竹田行之氏が中村先生に、QEH研究会の研究成果を体系化したシリーズの出版を提案され、先生がそのお申し出をQEH同人にお伝えになって同意ができたという。そして、同人諸氏と中村先生が編者となり、岩波書店から『日本経済史』全8巻が1988～1990年に出版されていた。中村先生はそのうち戦間期を扱った第6巻『二重構造』と戦時期・占領期に関する第7巻『「計画化」と「民主化」』の2巻の編者となられたほか、明治期のマクロ経済分析に関する章の執筆も担当された。このシリーズはQEH研究会の活動の総決算であるとともに、同研究会の存在を学界に知らしめた点で重要であった。

近代日本研究会

中村先生の日本経済史研究にとってQBH研究会と並んで重要だったと考えられるのが近代日本研究会である。この研究会は、山川出版社から1979年以来20年間、毎年1度刊行され続けた『年報・近代日本研究』の編集のために結成され、中村先生は、三谷太一郎、伊藤隆、坂野潤治、佐藤誠三郎という日本政治史研究の泰斗とともに第1期の10年間その責任者（すなわち上記年報の編集委員）を務められた。⁷⁾ ご自身も同誌に論文や書評を精力的に寄稿されるとともに、多数の優秀な若手研究者に論文発表の機会を提供された。同じ東大に所属されていたことのほか、内政史研究会、木戸日記研究会、日本近代史料研究会などに積極的に参加されていた⁸⁾ 事情も関係していると推測されるが、中村先生は、この研究会の結成以前から上記の委員の方々とは親しく交流されており、例えば伊藤隆氏と共に『現代史を創る人びと』全4巻（毎日新聞社、1971～72年）という政界・官界・経済界の重要人物のオーラル・ヒストリーを取りまとめた好著を残されている。⁹⁾ 中村先生にとって経済史、とりわけマクロの経済政策史は政治経済学なのであって、政治史の知識が不可欠であることを受講生にもしばしば強調されていた。¹⁰⁾ 例えば陸奥宗光『蹇々録』のような基礎資料や、坂野潤治『明治憲法体制の確立』（東京大学出版会、1971年）、升味準之助『日本政党史論』全7巻（東京大学出版会、1965～80年）、テツオ・ナジタ『原敬』（読売新聞社、1974年）などの研究書は必読だと言われていた。

むすび：『昭和史』など

中村先生が1993年に著された『昭和史 I・II』（東洋経済新報社）は、大きな反響を生んだ。同書を一読された方は、経済史に関する記述が意外に少なく、政治史・社会史・文化史に多くのページが割かれていることに驚かれるのではないだろうか。しかし、これ

まで述べてきたように、夥しい文献を読破され、また様々な分野の第一級の人物と交流して来られた先生の学問の広さと深さを知れば、さほど不思議なことではあるまい。先生は『昭和史』において、何物にもとらわれずに伸び伸びと、壮大な日本近現代史を心行くまで書き上げられたのである。

私は不思議なご縁で、中村先生が『昭和史』に続き世紀の交代期にご用意されていた『明治大正史』の草稿を原朗先生と一緒に編集させていただくことになり、『昭和史』とほぼ同じ分量の書物上下二巻が東京大学出版会から先頃出版された。この『明治大正史』も『昭和史』と同じく口述筆記が基礎となっているため、大変読みやすく、経済史以外の記述も豊富である。

中村先生が亡くなられた時、『毎日新聞』は「日本経済史の第一人者」として先生を紹介していた。私が大学院で先生の教えを受けていたころには、東大の経済史の先生方は、原朗先生を除いて、中村先生を経済史家としては公認しておらず、歴史好きな統計学者としてしか見ておられなかったと思う。中村先生も、ご自身の経済史研究について「僕のような素人が」云々というお言葉をしばしば口にされていた。上記の新聞の評価をご覧になれば、先生はさぞ苦笑されることであろう。

〈註〉

* 本稿の作成にあたり、尾高焯之助一橋大学名誉教授から貴重なご教示をいただいた。本稿に含まれる誤りがすべて筆者の責任であることは言うまでもないが、記して謝意を表したい。

1) 当時、東大大学院の経済学研究科では紛争がしばらく続き、指導教官制もなくなっており、院生は出席したい授業を自由に履修できた。こうしたアナーキーな状況であったために中村先生の啓蒙に接することができたように思う。

- 2) 戦間期の日本においてマルクス主義者の間で行われた日本資本主義の本質をめぐる論争。詳しくは小山弘健『日本資本主義論争史』上・下巻(育木文庫、1953年)を参照。中村隆英「日本資本主義論争について」(『思想』、岩波書店、1976年)には、この論争についての中村先生の見解が表明されている。
- 3) 尾高燿之助氏も『経済研究』第23巻2号(1972年)に同書の書評を寄っていたが、私が大学院生であった頃の中村先生はマルクス経済学者や経済史家の評価を特に気にしておられたようである。
- 4) 1970年代初めころには、東京以外の地域で独自の日本経済史研究が展開していた。関西では大阪大学の宮本又次氏を中心とするグループが、江戸期から明治期にかけての鴻池、三井、小野などの富豪の研究を精力的に推進していた。宮本氏の影響力は九州でも強かった。東北でも、社会学や民俗学の成果を摂取した中村吉治氏の近世農村研究は、すぐれた成果であった。しかしながら、東大を中心とした主流派の日本経済史研究者たちは、近代史研究に特化していた事情もあってか、そうした成果には無関心であったように思われる。
- 5) 当事者たちの意識は経済史研究ではなく、応用経済学の立場からの「現状分析」であった。ちなみに宇野派では、第一次世界大戦以降の「国家独占資本主義」ないし「現代資本主義」を扱うのは経済史ではなく、「現状分析」論の分野とされる。
- 6) 一橋大学経済研究所を中心に展開していた近代経済学による日本経済論ないし経済発展論の領域では、大川一司『日本経済分析』(春秋社、1962年)にみられるように、日本の経済発展における在来的要素ないし在来産業論は、すでに1960年代に常識化していた。
- 7) 第2期の責任者は北岡伸一、佐々木隆、坂本多加雄、御厨貴、三谷博の諸氏、および阿部武司であった。
- 8) 原朗「中村隆英先生の想い出」(中村隆英『明治大正史』下巻、東京大学出版会、2015年)402ページ。
- 9) 原朗先生も編者のお一人であった。
- 10) 伊藤隆氏の近著『歴史と私』(中公新書、2015年)83~85ページには、同氏と中村先生の昭和史をめぐる交流が描かれている。

(あべ たけし 国士舘大学政経学部教授)

目は語る

11月 高階 秀爾 (大原美術館館長、美術評論家)

維新の功労者 徳川慶喜 西洋文化習得した風雅文人

250年に及ぶ徳川政権の支配を打ち破って天皇親政の世をもたらした明治維新の大業の功労者は誰かという問いに対し、徳川慶喜の名を挙げると、いささか奇矯な言と罵られるかもしれない。

しかし、後述の展覧会にも出席されている小林清親の大判錦絵「教導立志基 徳川慶喜(明治19-1886年)」は、この最後の将軍の端正な姿を描き出し、そこに「慶喜は寛仁大度で天下の機勢を率いし、明治維新の功労者」という一文が添えられている。この時点では慶喜は、



川村雄雄「徳川慶喜像」徳川記念財団蔵



徳川慶喜「日本風景」久能山東照宮博物館蔵

写真などの歴史資料、他方スケッチや下絵を含む美術作品を多数揃え、政治史と美術史の双方にまたがって慶喜の生涯を辿った意欲的試みで、出品点数は約350点に上る(12月15日まで)。千葉・松戸市市定歴史館との共同企画である。

内容は、徳川御三家のひとり、水戸徳川家の江戸藩邸に生まれた慶喜が、将軍職を継ぐまでの少年・青年時代(第1章)、次いで大政奉還、王政復古(第2章)、維新後静岡に引きこもって油絵や写真に親しんだ時代(第3章)として最後に再び東京に代表されている。

慶喜が油絵を学んだのも、この開成所の中嶋仰山からであるという。そのほば時系列に沿った構成となっている。このうち、美術史的に特に興味深いのは、「文人の喜びと眼差し」と題された第3章である。そこでは、西洋先進国の学問、技術の導入に努めた幕府の洋学機関であり、いわば江戸時代の「文明開化」先導機関とも言うべき開成所の西学部門を担った川上冬樹、高橋由一、島崎谷本の四人の業績が改めて見直され、船載の石版画や写真などの資料と共に展示されている。面材や手本がおよそ不十分なこの時代に、冬樹作(とされる)「ナポレオン」像のやぎこちなさが克明な描写力や、慶喜の肖像画の油画的表現は、称賛に値すると言ってもよいであろう。

寄稿 御厨 貴 (政治学者) 昭和史よ、永遠なれ 経済学者 中村隆英さんを悼む



中村隆英さん

それで、絶対に次が聞きたくなる話しぶりであった。

中村隆英さん。長く東京大学教養学部に通られたが、かつての駒場の自由な雰囲気の中村さんの視野を、本来の専門の統計学や現代日本経済分析から、本人が口癖のように言われた「僕は歴史の人間です」から、象徴される近代史全体への関心に広がっていったのであろう。現役時代は、よく縦横無尽なお話を伺ったものだ。

中村隆英さん。長く東京大学教養学部に通られたが、かつての駒場の自由な雰囲気の中村さんの視野を、本来の専門の統計学や現代日本経済分析から、本人が口癖のように言われた「僕は歴史の人間です」から、象徴される近代史全体への関心に広がっていったのであろう。現役時代は、よく縦横無尽なお話を伺ったものだ。

「リューエイ」さんになった。

一九七〇年前後から九〇年代にかけて、中村史学は豊かな土壌の上に、さまざまな編纂の形となって花を咲かせたと言ってもよい。中村さんは、オール・ヒストリーの先達の一人でもあった。『現代史を創る人びと』(全四巻(毎日新聞社、一九七二-七三年))における財界人、企業人、銀行マンやエコノミストへのインタビューには、今でもハッとさせられる。中村さんの現場感覚にあふれる問いかけに、皆思わぬ口を開いてしまうのだ。

そのことを私は、中村先生の晩年に宮澤嘉二元首相のオール・ヒストリーに共に携わった時に実感した。軍事教練の思い出や戦時・戦後の生活感のある発言から、みごたくに宮澤さんの記憶を軽快に引き出してしまおうのだ(『聞き書 宮澤嘉二 回顧録』岩波書店、二〇〇五年)。

かてて昭和と共に生きてきた中村さんは、自らの生き様と重ねあわせながら、同時代史としての永遠の昭和を描くことに成功した。『昭和史 上・下』(昭和史 1-2) (みすずや・たか)

野村胡堂文学賞に小中陽太郎さん(『預へよ源内』) 第一回野村胡堂文学賞(日本作家クラブ主催)は、小中陽太郎さんの「翔べよ源内」(平原社)に決まった。小中さんは1934年、神戸市生まれ。江戸中期の博物学者、戯作者の平賀源内を主人公にした歴史小説。選考委員長の大佛次郎賞、そして英訳版が学士院賞の栄誉を受けたのもむべなるかなと信ずる。

犬のための建築展

評美術

好企画 個性きらり

犬と建築。かけ離れた二つの領域が交わり何が生まれるのか。東京・乃木坂のTOTOKYARI・間で開催中の「犬のための建築展」は、ユニークな視点からデザインの可能性を探る好企画。米・都市を巡回し、今回初めて日本で開かれた。

デザイナーの原研哉が長年培った企画、著名な建築家ら13組が参加。テーマは「犬の尺度から建築を捉えなおす」。柴犬やチワワなど、それぞれが具体的な犬種を「施主」と仮想し、制作する構成が愉快だ。作品規模は小さいが、どれも作り手の個性や考え方がにじみ出ていて、重鎮の作品も味わい深い。伊東豊雄は老犬になっても散歩できる「家」をこしらえ、内藤廣は暑がりのスヒツツを念頭に、体を冷やせる構造物を提案した。「犬の幸福」に寄り添う発想がしみる。



妹島和世のピシオンフリーゼのための建築 トラフ建築設計事務所の「ワンモック」=いづれも©Hiroshi Yoda

重鎮の作品も味わい深い。伊東豊雄は老犬になっても散歩できる「家」をこしらえ、内藤廣は暑がりのスヒツツを念頭に、体を冷やせる構造物を提案した。「犬の幸福」に寄り添う発想がしみる。ユニークな発信方法も特徴だ。公式サイト(architecturfordogs.com)をじらり、作品の設計図を誰でも自由にダウンロードできることにした。完成品はサイトに投稿し、シェアできる。「多くの人に愛される犬は、グローバルな共通項。作品が世界中に広がっていく可能性がある」と原。ネット時代ならではのメディア型展覧会といえるだろう。12月21日まで(日・月、祝日休館)。入場無料。問い合わせは同ギャラリー(03-3402-1010)へ。(永田陽子)

鷗外と原田直次郎 交流たどる特別展 東京都文京区で



原田直次郎「男性像」1896年、個人蔵

森鷗外がドイツ留学中に出会った画家、原田直次郎との交流を軸に、鷗外と原田直次郎の特別展「鷗外と画家原田直次郎」が、東京都文京区千駄木の同区立森鷗外記念館で開催中だ。原田は、近代の洋画家黎明期に活躍した画家の一人。帰国後、内閣勸業博覧会に出品した代表作「騎龍観音」(2007年に重要文化財指定)が評論家に酷評された際、鷗外が雑誌上で反論し、原田を擁護した。その後、写真作品も展示している。24日まで。【菅桂子】